911.3
ム

陸奥鵆（ムツチドリ）

元禄九丙子
十月十二日　翁三回

今更に袖をしほるや冬の雨　桃隣
待ゝ寝は酔和らくく宿也　嵐雪
水甕を汲ほすまへに担ひて　素堂
障子をのかる出れ出つつき　神叔
御前揃んに緒を正しく候そ　挙白
乳川離す児をおとらいゞ　東潮
旅好キ好友流山ゆ遊ばん　素秋
軒〻つくる行を川へ築かす　析風

ツ

永雨し重の減りしも泣信　李下

一理居侍ヽ出祢る侍　仙化

法眼の接婦見合ス和巾紙　琴風

梢を探し呑口を様　林也

下谷より子供へ近キ道知る　李里

梢の露ぞ中真ん慈　桃舟

夕涼机ならしく梗ニ節　介我

云ふこたれをあつまりて泣　桃明

小倩お遊子寐ある江湖寮　全峯

白く桔梗の結句志作りし　湖松

茶わ垣もし月や胡おとく字　林也

鶉ち呂にて衣うつ路ニ脱リ　琴風

明嵐の萩ふく作りて大津口　枳風

涅槃の床りもしの數　桃隣

羽箒で蝶を掛らく又花セ　東潮

ちづんで声をかくる大文字　素秋

初おと家へしとく繰おとして　神叔

まだ稼の舎利を後ヘ泊湘　李下

月積山にハ布しく苔乃跡　嵐雪
手に氣の杖を誰か云捨　李里
出家し給ふ裹く似合浦　介我
剃ム伴の肩をつゝて袈裟　全峯
見物する此の國の白鳥　桃隣
信を志らせる秋し春行　林也
詩ニ画く皆香也し酒舟　桃舟
路并の日なむこい綾餘　東潮
猫に窮し子孫りけりなめ嵒　介我

ウ
蛍に上名を出す蜘の池　神叔
其情ほめ女に宿る庭屋敷　李里
流るゝ川の中に温泉　桃隣
赤キ実は其くやあらん葉蔓　嵐雪
一代かりなよ紀にに遠道　東潮
鼻息ふ時樣しばる月の向　素扶
霜しうろし溜る棧柄　李下
いつ面形く遠よふ膝よ縣つわく　琴風
唐中庭花を菟押合　拙風

末留し撰へまれあるとも所　桃隣

釜屋の爐（ホド）を尽すたへ毎　琴風

業の蝉子四十のかくし　湖松

大ましくと友の皺のす　李里

一年の五条は寛くなるの河　嵐雪

始首の紙花件午実　氷苑

芭蕉三回追悼獨唫

其まゝ霜をかけたる長慶寺　桃隣執

山菜萩の根り緑青乃灰

三尺の琴を胡坐（アクラ）にかいのてく

紙にわ落し表紙の画

物かしをうてロミ忘れけれ

井出の漬こと覗く鶺鴒

二川ちらすてうちとたぐの月

穂たのは切く結ス　蜀泰

ウ
お刹り荒笠清ん林丸風
卯月に仁幸は家樣の会
大根の種をこ川よう伐きつし
會は近きれ五月六月
蚊(ハエ)蜂(ツキ)射(ヨト)めが清んせ利くし
鼻くさくくる長崎の露
野の味ねッく松浦のまつ線
浮めんよこのしよ様く亜にわ
勝笠の参紙二帯うしゆりれ

まやれいくと踊さやく
月もよしきりかで町の織屋前
扇ありきの折て蟷螂の形(ナリ)
作り丘母乃楼嬉ゆ家しく
魔をかくも修羅い勤す
見きぬく腮とかめの常き食
松茶もみくよい火口かわ
各七日浄うれて始めの毎
涛のまゝ小ゆ郎もおいかれ

淀鯉川は丹後与謝の入文り
まさる谷名るけるいさゝ蒙病
目覚のきや候けも合歓能
まうめ妨きれの世にしれ衣
探なる人のみし説ハアらく
名将のゝ札を志る番外
遅りし双く軒ち菩薩仕舞
菜碗より おゝ組の腸
まふの月出為の心定まりし

豊浦の奈ニ而き所にし
二ツ舟處の女子とい者初次り
夜明り事新く見も名ハ立つ
かの姫帰りも御く二十歳
酒くころであこゝれ御新嘗
娘ゝかりもまさも大山の坩ゝ
桃灯なく 嵐 立かん
百歳の外五六百志用 千
者よくもた者も底中仙臺

人参て活ぬ命を捨るなれ
唯おなしくしてさりとは雨
逢ふもしき棚の鍋をかよふくらし
あまりのまゝしまいるの愛
門額ス庵のたゝん月と暮
海雲をまくる跡の古き
帆をかけても家に入る雲のお
電光といへる皆こるゝ山
離京城親子一生呵ラ様

三

源助が筒鳴御意を蒙ん
語仕きへまゐりしられ七文三
丈程りくアんれも金のあまか
茶利しく腑のそいが絶し
此夜文字ゝ一丈のあ
こざしくも梅も椿も桂めく
件人いふ喜文入の縁
輝（アカリ）や顰（ヒ）つる行く義清き
淀のゝ宿しての川猪の月

分術あれ醫師なん筆なとに
拄拝(テギ)して掛る扇の背
尺八して断云ん馬の森
竭島門して續く浦く田
逢筋して白ふ綸子の若し去りく
鳳楼頭にして紀唐
世は夜あそれのみもそして夜なく
燒折ふして須しかるも丹
一額そとして濃まる郭云

右

蝋地して書く筆ハ筆
須城も綴して作法は鉛坂
大粒形月代細フまさて至
有時は藤をまあ乙非ふ有
今限といふが内泥ハ空(カラ)
和(ナキ)をみてまぐとさし返ム葛線
遠く画を形して蒜(ニンニク)乃長
深淡は眠ル人あらし咋ふる
辛しの給月は唐穿の壬

惣別のみ地代のさん竃のと
役者如円乃光ル佛壇
四季咲の鉢を咲られ杜若
こゝら集くハ二里程の道
早晩かへく青き折てとれなる鳥
自よしあくゆかしところやしうの傾
急しくと待ッても待きなるとれ
清池花坂の中如暮
追出しく恋ろ如いさむ水の月

相對待くてこまる盗人
股趾が十八ぶく明離と
騎くいなく急如膝
見えさやし文を読よう不動院
下戸向一座く合ス算盤
増つよ作ヌ細工了猶如倉
しきくみなよはいゝね傘
名号を清よいふもみんのなわ
指ゝつの数を地代隔テす

誹諧の句ハ毛年に営ひして
三ツ まとなし　櫻花翁

二友庵直居士追善に家集の
風雅をおもひされけるを
追悼に此集を償備ける
ともなかし
寿堂

あさきよやおもふかしの
山家集

於別墅鳥居氏興行

蓮淑の扉てきかよひくる　湖松
追詰られて轉(コケ)る庫の子　桃明
弁當に客が重る事に毒なり　桃舟
こまよ古ケ日との月の宵闇　桃隣
松下のきま積なは秋の風　桃洞
又損されて頬忍ふの衍　湖松
五六人唐が国に養ふるを　桃隣
戸掻り謡し庚申のれ　桃舟

き貝の光く通る十文字　桃明
日和のよろしきんの正月　桃洞
裏辻の裏ともに宗門割出ス　湖松
宮ゐ左の右京ゐ参　桃明
冷水の強を捨る井戸の蓋　桃舟
勇りしよる組伏割ル耳擽　桃隣
新みずも二すゝ手あるる曽し　桃洞
相と手綽りし露乃巣簇　湖松
山ゐ守冥く見ゆるや月の影　桃明
糸流にわか私を皆とりけり　桃舟
賭落ス卿侍乃二番生　湖松
香の物多い脂を実出ス　桃洞
禁え法をゆまく泥落り　桃隣
淀の牡丹や淀川の水　桃明
梅ゐ子の札のうち先つい立て王　桃舟
誓女の丈も城方の城　湖松
まへつきかえすて見て寸下集　桃洞
通り涂しても集を継閑　桃隣

京まの夢は絶くし白い菖ね　桃明
鋤立しへる庵は乃刀薬　桃舟
雨経り雑巴ニや箕竹　湖松
ひ植れしくし鍋米は月　桃洞
鏑流馬や天拝鶯はめくらん帝　桃舟
月しりても鼻へ猫へ仲立　桃明
四ツ寸らは鉢合も文字のらむ　桃隣
千石作る三石は株　湖松
羽二重は先味一〇一茶衣　桃洞
春は下主し虫ス文書　蕉

一とせ芭蕉深川に庵して深川の岸根を去りし田村鉄は風流をのこし申ことは跡を慕ひ関越んよ句側の相家民をとゝめる
俳ぞ
猫也く作は払つ旅衣　桃隣
葦舟とくれくめくるむ乙女　等躬

遣持かなつゝる庭や一夜ねらん　助叟
白河の関は越る
印籠し黒さやうつと新發師　仝
宮まき扇かへ、ちまかく　桃隣
業におほえ子の部の絵馬　芽躬
對両雅
指よりくらゝまゝ二寸の蒔筆　仝
尻篠咲ゝ亀のそひ尾　助叟
夏の月亭の四隅の手を明し　桃隣

鋤立上京惜別の巻難波園女判にして總登たる語州　發集の序に撰びもの連中志して撰する所なり

足なも遠山もみえる雪の雲　桃隣
ちし筆移ん草やまろき箸　鋤立
なお物の蓋は明れに濁鈍なく　補水
花りうちは何も相のしれ　方雨
遠垣の月一沙の丸　今相　宇月
千句吟まる高き風　冬市

ウ

使ハ虎も狩りて又殺す　霞山
一文銭の耳をはさんで　哺水
押合ふ高瀬船揉し揉にあが　旭志
小やゝ花やさらし近江の正月　桃隣
松の真䡗(ツカン)て買ふ煮(ニラ)莫(ス)責　冬市
鼻に住しもよい家ありて持　方雨
こゝは唯名高きをいての角田　岱毛
無慈悲の職(スリ)をもちし池にある　御立
文や丁や住吉濤岸の和田　桃隣

外史の席とり合ハ喰ふ鐵　霞山
二十五の尼京人も華しく　守月
詩とゞ絡ぶ縁に糸趣　旭志
白に坂り路をこまし嘸や嘸　岱毛
男なる千(ミ)の細か月りゑ　礒水
旅し枕御積り繫(クハイ)へ両の後　冬市
涙は服やさし色含てまかれし　御立
中高く試ミけると紅粉して　桃隣
國阿の足跡おそれ修験を　守月

二

散れ比百日紅も二百日　茹苑
碁盤を押り筆の鞘　方雨
外ト通ル人呼掛ル庇の窓　蕉竹
持ジ物つみをりしに刺トゲを往　旭志
うれしさもつゝみし源氏手鏡　柳主

ウ

月とるうにあけ引おけ　蕉竹
セツ一つゝ大宮通雑の音　宁月
小児の脈をみかしかとこゑ　冬市
籠鶏タカカケにもらんて買人足袋の紐　旭志
同宗旨ハ合ウチツイて浄土　硯水
端まれ刷も猪ん岩の附　方雨
妻を向れよ人を出竟　茹苑

於貞列石川丹内氏興行

ウ

あさましや宮の白しや百貫帅　桃鄰
神印急ぎ見くる生姫　等秀
急ゞくと地道牛小手言く　等盛
走狩姫曲る浪氷のなる　等般
油売も松毒合来年の月　如叟
鶉目なけく嵐露なる　桃鄰
どふまく軒の瓢り実のへく　等秀
籠の元出る佛ささしよ　等盛
雛殿も剃師の肉なる元合じ　等般

旬じやといへと河る峰し　如叟
殺中ずる組流す犢清水　桃鄰
二夜めの嫁らやくとさね　等秀
醫師なりつかわもんのく　等盛
道事みぬ間し縄垰さしおス　等般
月宮の箱の鉢く一休　如叟
やりと挽くる鳴の羽箒　桃鄰
人計ん拝やみ近んおの掃　等秀
気もふらし般蛸の般　等盛

三吟

唯一ツなれくといふ音これ　風調
涼しさに庵の戸眠りあけり　五粒
松の花傘拝我子捨下にて　我
ぬれし着設て雨の大粒　調
詩有る筆の用意ス絡には　粒
借りた話も釈と推蔵　我
ウ
百蔵ふみ小花尾の花けエむ　調
火は絶大憶ゑは縮むる　粒
湖荒廃すれ蔵ま投げ行く　我
小むつしいとやく判ん兄　調
桜去の山夜神ある昔　粒
年足らあまし捨て人寄れし　我
荒藪から守備所る前の速(ヤツキ)　調
路花(ハツハ)拾ゆるも花に花寄(ヤキ)　粒
熱(アツ)りたち床(アリ)と見て病月　我
戯の切しいを酒よりする　調

三吟

唯一ツをりとりて笛ゝ花　風調
涼ゝむ序の石眠りあかり　五粒
杯のゝ取傘絆杯を捨下リニげて　傘我
むし着設く雨の大粒　調
詩月を筆ゝの風足ス擂をに　粒
借リた銘も稗を振舞　我
ウ
百蜀む孫ゝ花尼の名得工む　調

私はまさ人揮ハ宮と成　粒

眼を閉して夜ろ長さ哉　我

一本ハ君が大豆も秘しおく　調

隙て兎ヶ角扇編に成　粒

庭に残雪が出ヶ雛とも　我

旅ねたまへ割元の門　調

少さる錦の水出理を問ふ出亦　粒

傅きし此桜銭ね奥を刳裂　我

末の外に気まゝ汲み語りし言此有　調

赤きさ幸表も人の前へ売　粒

堂の屏風頭ル押手や写さん　我

禁好物は酒酌テ括ナガり回　調

浮乳りは常住此下ハ紙なき髪　粒

胡ちへ此綾を半間浮出ス　我

足もとに気をつけて此魚腹を見ぬ　調

御衣を掛けし懺寸楽行　我

口惜しくも負つゞきあつて金んとる　粒

癪療治施じ瀬ちし雨　調

東風白ハも渡るにかよ山　武

てまりつく果しら六尺の袖括　粒

冬之部

草畑に豆や用くしらぬか宮　桃司子

おまへ入くく後ゝ濡るあられハ　立志

見る扨ゝつくむ青菜し　調和

霰降行風にこやく庭柏　無倫

合縁と猫とまた娘犬雑ハ　挙白

永餅や河白くの新る卅六年　神叔

伊瀬の音や夜声に追ふ去て料理　東湖

旋ゝ川渓去りハ冰となれ　立蒲

寡か乱を縮く

けふもこ酒明くる夜雑ハ　不角

まとりくあまかぶ菜も毛師走　素伏

東風の帰しやまかぬ菜の花ぬかな　大坂　月尋

あさ〳〵は草も露もあらぬ北に　定松

雨しれはけふは露さへ迷ひけり　深川

早川の花かけ水にうつしけり　藤下

鼓かけて夕への戸窓の月夜かな　不碩

まちしくも旭に割て水けり　不琰

雲はけやあらぬ露草も見へけり　帋白

渺さへ立年弥して枯せけり　流友

木兎の笛にむかふる月夜かな　李里

草菴の秋冬

木枯や十人ましる旅やとり　琴風

大井の荒瀬しけ村月夜かな　今我

流れの果も色もや霜氷　同

朔日のありし蓑を脱ぐや網代守　文士

雪国の吹おろしや旅同士　奥荻田 俳然

神無月姿のまゝし冬枯野　鳥集

冬川や行にも消て流れゆ　松亭

もとの根に蓮の枯や山芒　蛙歌

当座もかはらぬ住も枯葉かな　樫堂

初くも武蔵にかゝる花吉野
しらぬ冨士なりけり

蝶やみどり襟縁や冨士の脂　闌春

もり縁

神楽や筆作山乃さくら　桃隣

花あへてこゝろ藤波の霞かな　冬菊

見ぬ世の名残りかな花の花の跡　松嗜

梅の尾や宗の角附の新紙子　橘之

笠しれもさて紙のしほれかな　子照

さしかゝり結ひ出宮をのみ汲し　冬市

川淀や桃の色見える近江の家　九梅

茶摘青のかしらぬ家や村附家　桃隣

大津尚白亭

ちまきの岸や高きの目とまる人　御笠

蝶帰に花見る竹や鼻の下　蘭水

さきいまに花あかれ柳かな　大坂　吉雄

かし小川の小田鹿わくゝさかり　序令

菜の花や雲は流れて山の縁　羽黒山　呂柳

茶の露すゞしき水や新麦隣　仝　呂笑

落葉り落葉となりて八栂尾　風調
冬籠

菜枯れ人のあとよりあかぬ庭　御立

鎌倉極楽寺

口切りて眠る茶屋淋しぐれ　郷藤

由比の浜

人の鳴鵜にや浜千鳥　同

松の国

葛城の落葉の揺や蛛の糸　同

梅宗庵補

夕嵐ごゝの鐘に落るや帰り花　同

膝やゆく年ゆかしの行せて　止水

口切やえらさて啄(ツム)小唐盞　艶士

小姓や庵でねうちもなき夜かん　芳峡

十月や出雲の國も寺が留守　志言

綠花川の行月(ヘケ)元にかわれ者　冬菊

定まる化粧が根深や今紀念　峯

浮世ぎよ結法に男女子神もかれ　等芳

清きまのしや要山寺の蓑と笠　芦葉
鶏の聲とり雲の落葉かな　如行
由形りよ水筋にや翔のかる　文車
水際よあつれく翁しまれ花　利牛
風しゆれて菊の蔭かな　嵐蘭
傘とり霞きらぬ宿すかな　汶竹
神霊や先れもる御経に　海動
落葉や相撲宮のる鳴の島　蓬山
落葉にて鉄の宮やのかれ　兎園

ちんむき隅よ見れ猪紙衣かれ　堤亭
石瓜の藤の住家や冬の月　ゑ長
寒ぬ夕の香菊棚と山寒な　山夕
霜かるのかのかなく冬の大井河　桃鄰
浮火饒や桧物造りに山と峠　浮生
水形あくるやしき牝のあそせ桃　真義
水ふさしつゆく四月落葉かな　芭毛
菫ゝ花卯花の枝のさかな　ゑ安
雲の頭や刀の柄よ小挑灯　松了

失りしこれは箕よふ色牡丹　竪

右は新白しらずと言ふ文通し侍りし清水寺の間に
奈かくして夜をの中を探りし漸一句に捨て

何事も好み鳥帽子ののとや初しくれ　素

學和大 第6616 受入 36.3.14

冬部終